



月刊 千葉労働

革命は何度でも

4万郵労総連合・中島講演所

今号では、日刊四五七七号に続き「国鉄分割・民営化一〇周年弾劾！四・五動労総連合総決起集会」の報告として、本集会のメインであった文芸評論家の中島誠氏による講演「時代の転換点と国鉄闘争」の要旨についてお伝えします。

10年の頑張り、 イマニズ梨

今から四七年前の一九五二年前後においては、国鉄労働者に対するものすごい人員整理と弾圧、これと朝鮮戦争とが一体になりました。今から三七年前の一九六〇年は、岸内閣による安保の再定義と延長ということと三井三池闘争が同時に進行した。そして今、沖繩闘争と国鉄労働者に対する抑圧が同時に進行しようとしている。戦後五二年の歴史の中で、この戦争と労働運動、つまり反戦運動と労働運動とは、はっきりと結びつかざるをえない。そういう意味で、この時期は大事な時期。

一〇年前の一九八七年からJRに衣替えした国鉄。当時、国鉄赤字のために民営化せざるをえないと言ったが、今二兆円とかに増えている。根本的な日本資本主義の末期的な姿が国鉄の累積赤字を大きくした。そのことにメスを入れることは、国

家権力もJR当局もほとんどしていない。一〇年前のスタートがいかにかデタラメだったのがはつきりした。

分割・民営化に集約された国鉄労働者に対する不当な労働行為が今、全労働者に襲いかかっている。日本の労働運動に対する経営陣の態度が非常に大きく質的に転換した。日本の戦後労働運動史上非常に大きな歴史的な変化が訪れている。

そういう中で国労の人たち、動労千葉の人たち、動労総連合の人たちが、あるいは三万人、七百人、千人単位で、小さく固まって歯を食いしばって小さく頑張っているということではないんだということ、皆さんの力で示していかなくてはならない。

ここ何カ月間の間にJR総連・JR東労組から国労に入ってきた人たちが、日貨労から国労に入ってきた人たちがいると聞いておられます。必死に自分たちの組織を守って五年、一〇年たつたではなくて、そういう新しい人たちを入れて、獲得して奪い返していくという闘争が、これから始まる。それは一〇年間、皆さんが頑張ったからそういうチャンスが訪れた。これから、反転攻勢の組織拡大の方針を自信をもってやりきる時に来た。

沖繩の問題を考える。沖繩の基地は英語ではベースです。ベースというのが普通です。つ

絶対必要

沖繩闘争

まりここから世界中のどこへも出動する世界戦略的な意味をもっている。政府自らつくった法律を蹂躪して、特別措置法をつくろうとしている。何がなんでも日米安保体制を堅持しようとしている。

それはなんのためかということが、日本中の人間にわかってほしい時期だと思う。今、国際的にいろんな所で局地的な紛争が起こっている。そこにどんどん出撃するということ。日本の自衛隊も出撃する。

沖繩の人たちは、自分たちの土地が蹂躪され、基地になっていくために、アジアの人たちはじめ、アラブ・アフリカの人たちも含めてどのくらい警戒して、恐れているか。本当にアジア人民との連帯ということを肌身に感じながら、自分たちの責任だということに闘っている。

アジアに生きるわれわれ日本人の意味というものを明確に再認識してもらうために、沖繩闘争が今絶対に必要。沖繩の人のためだけにやっているのではないということをはつきりさせる必要がある。六〇年安保規模の大行動、大運動が起きてしかるべき。

自分たち自身の創造的な力をどこまでもつくり出していくこと。レジスト、抵抗の時はないか。抵抗と反逆は違う、はつきりわれわれが相手に対してノーと言う。そして相手の代わりになる。抵抗から反逆のプロセスを経ないで革命は成就しません。

あえて一言、革命は何度でもやって欲しい。この半世紀、いや一世紀近くの間、世界中のいろいろな民族、世界中のいろいろな国家が、あらゆる苦勞を犠牲にしては挫折し、失敗をし、転落し、変質をしてきた。人間の歴史の世界的な規模での、本当に尊い実験であった。これは絶対に無にしてはならない。新しいわれわれでなければできない革命を成し遂げるために、一人ひとりがリーダーとして、奮闘してもらいたい。

いちばん大事な問題ですが、人間としての心、魂がそこにあるかどうか。この自信と自負がないところに、新しい労働組合、新しい労働運動は生まれない。

抵抗から反逆への、さらに革命への道の展望を切り開いていくということができれば、失敗するかも知れませんが、それにへたばらずにやってみれば、皆さん自身のためにも、われわれの闘い全体のためにも、必

大きな前進となつて、戻つて、戻らうと思いません。

人間としての魂